

身代わりになってくださった阿弥陀様 ～東京大空襲と直江津空襲～

塚田 富雄（昭和6年生まれ）

私も直江津の空襲^{くうしゅう}を体験した数少ない人の一人である。平和を希求^{ききゅう}する者としてこれを詳細に後世に伝えることは義務と考える。直江津空襲については既に大部な「こんな日々があった 戦争の記録」が出版されているが、その各論の一編として認^{したた}めてみたい。

直江津空襲は昭和20年（1945年）5月5日であるが、その前の3月10日にかの東京大空襲があった。300キロメートル近く離れている我が家も被災者の一人なのである。

姉（大正9年3月1日生まれ当時25歳）、兄（大正14年12月7日生まれ20歳）の2人とも、空襲により東京都浅草馬道3丁目路上において死亡した。この悲報は、日本堤警察署長警視から6月1日に報告があった。多分B29が投下した焼夷弾^{しょういだん}を直接間接に浴びてのことであったと推察する。

姉は学校を卒業すると上京、10年近く浅草で店員として働いていた。敵機が本土を自由に飛来するようになって首都圏空襲も時間の問題となっていたので、母は弟に姉を帰郷^{ききょう}させようと迎えに行かせた。死亡状況がわからないので何とも言えないが、弟は姉に会って主旨を告げ、帰郷の準備をしていたのだろうか、とにかくやられてしまった。2人とも一緒に被弾したのか、時と所を離れてのことであったかは判然としない。

私の兄が姉を迎えに行く時にこんなことがあった。上京する兄に母がにぎり飯を持たせようとしておにぎりを作り、囲炉裏^{いろり}で渡しにおいて焼いていたところ崩れてしまって形よく焼けなかったことが忘れられない。まるで今生の別れの知らせであったと思えてならない。

兄が死亡していたのも知らず、徴兵検査^{ちようへい}の通知が届いた。兄が行かないので憲兵隊^{けんべい}が我が家に来たので母が代わって行って釈明してきたようだ。

私は昭和6年10月10日生まれだから13歳7か月の時、直江津空襲があった。我が家は当時大養村西福島（橋場とも）にあった。今は廃墟になり跡形もないが軽便鉄道^{けいびん}の新黒井駅近くの日本通運の倉庫のすぐ南脇の家に住んでいた。私は村立南川小学校を卒業して大養の高等科へ進んだが、父が前年亡くなったので1年で中退、生計の担い手として昭和20年3月頃信越化学工場へ入社して働き出した。空襲のあった当日は夜勤明けで就寝中であつた。昼近くの11時過ぎだろうか、この世のものとも思わぬ物凄^{ものすご}い音がしてきたので慌てて家を飛び出し逃げた。隣の倉庫に爆弾が命中したのだと後で判明したが、無我夢中^{むがむちゅう}で新黒井駅から西福島方面へ逃げた。信越線の線路の中で人が1人倒れているのが目に入った。爆音が止み家に戻ってみると、焼かれたり倒壊しなかったものの、爆弾投下^{しょうげき}の衝撃^{しょうげき}だろうか、爆風によるものだろうか、仏壇^{ぶつだん}がひっくり返り御本尊^{ごほんぞん}阿弥陀

如来像の右肘から先がもぎとれてしまった。母と2人で家にいたが、無傷で逃げおおせたのもこの阿弥陀様が母と私の身代わりになってくださったものと有り難く思い、今でも5月5日には拝んで感謝の意を表している。

ところで、家の中は爆弾の破片が無数に刺さっていて住めなくなってしまったので長年住み慣れた地を引き払うことにした。しばらく旧8号線の黒井の親戚に間借りをして昭和21年4月頃から現在地に移った。当時は電気がなくランプ生活をしばらく続けた。水道もなく井戸水を使い生活した。もちろん道路は舗装などされておらず砂利道で凸凹していた。近所の家は我が家も含めて4戸だけであった。

平成18年、私は75歳になる。大病も経験したが、何とか小康状態を得ている。今ある命を大切に、東京空襲でなくなった姉と兄の分まで頑張って生き長らえ戦争の愚かしさを語り伝えていきたいと願っている。

終戦の玉音放送があったのは昭和20年8月15日、この日社員全員呼び集められ会社の休息所で天皇陛下の終戦のお言葉をラジオの前で畏まってお聞きした。しかし雑音ばかりでよく聞き取れなかった。ともあれ日本は戦争に負けたんだ、これで戦争が終わったんだ、という安堵の実感だけがはっきり持てた。

人間の本能の一つに「闘争」があるといわれる。このまま放っておくと戦争を知らないものばかりの世の中になって、問題解決の手段として武力に訴えるというようなことが起こりかねない。戦争が起きないようにするため、まず体験者が、戦争の悲惨さ、そして無意味さを周囲や後世に語り伝えていく必要性を大いに感じ、この小文を認めた次第である。